

ローマに着いたパウロには、番兵付きの家が備えられました。彼は三日後にはユダヤ人たちを集め、エルサレムなどのユダヤ人たちから責められた点について釈明しました。一方のユダヤ人はパウロについての話しは伝わっていないことと、キリスト教については非難があることは知っていると言ったことでした。

1. 神の国のことをあかし (23～25節)

①朝から晩まで語り(23)「そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。」

ローマでのパウロの住む家には、多くのユダヤ人たちが、そこを訪れることになりました。パウロは彼らを歓迎して、朝から晩まで語り続けました。そこでは神の国について伝えられたとありますが、マタイ13章等において、イエス・キリストがお伝え下さった教えはもちろん、この世の原理とは異なる神の国の奥義を伝えたことでしょう。また、旧約聖書の律法の書、預言書などを通して、そこに証しされているイエス・キリストについて伝えたことでした。

②ある人々は信じ(24)「ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった。」

そのメッセージを通して、ある人々はパウロの語る事を受け入れて、キリストを信じましたが、ある人々は信じようとはしませんでした。それは、これまでの宣教地と同じでした。

③意見が一致せず(25)「こうして、彼らは、お互いの意見が一致せずに帰りにかけたので、パウロは一言、次のように言った。『聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの父祖たちに語られたことは、まさにそのとおりでした。』」

こうした結果、信じた者と信じなかった者との間には不一致が生じ、彼らはそこを立ち去ろうとしました。そこでパウロは、彼らの父祖に語られた旧約聖書のイザヤ章を取り出して、伝えました。

2. イザヤ書の預言 (26～27節)

①聞きはするが(26)『この民のところに行って、告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。』

26～27節はイザヤ書6章9～10節の引用です。そこにはこうあります。即ち9節では、彼らのところに行って福音を伝えた後に、それを聞いた人は聞いたとしても悟らず、見たとしても真理を知ることはないという箇所を伝えたのです。

②民の心は鈍くなり (27)『この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、その目はつぶっているからである。』

イザヤ書には「この民の心は肥え鈍る」とありますが、大切な事柄に対しての敏感さを弱めていることです。また、「その耳を遠くし」とあり、肝心なことを聞こうとしないのです。さらに、「その目を堅く閉ざし」とあり、見るべきものを見ようとしないう状態なのです。

③その心で悟って (27)『それは、彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って、立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』

「目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず」となれば、もはや主に悔い改めて赦されこともなく、いやされることもないのです。イザヤ書で指摘されたことが、今ここにもあるのだとパウロは言います。

3. パウロのローマでの日々 (28～31 節)

①異邦人は耳を傾け (28)「ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」

神の民として選ばれたユダヤ人は、これまでも福音に心を向けず、ローマのユダヤ人もそうであるならば、救いの御業はもっぱら異邦人に広がっていくことを覚えてくださいと、パウロは厳しく伝えるのです。なぜなら、異邦人は、福音に心を向けていくからだということです。

*脚注に、ある写本には 29 節として「彼がこれらのことを話し終えると、ユダヤ人たちは互いに激しく論じ合いながら、帰って行った。」が入っているとあります。

実際、そんな様子だったのでしょ。

②自費で借りた家に (30)「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、」

このようにして、パウロは満二年間、自費で借りた家に住んでいた、とありますが、どこから収入があったかはわかりません。天幕作りをするにも不自由な身では無理だったでしょうから、クリスチャン達の援助の蓄えがあったのかもしれませんが、そこにたずねて来る人たちを、誰もことわることがなく温かく迎えたのです。

③少しも妨げられず (31)「大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」

そして今や、彼らに対して、何の妨げもなく、神の国について、宣べ伝え、主イエス・キリストとその福音を教えたのです。「大胆に」とありますが、まっすぐと信仰に入ることを勧めたことと思われま。

《結論》

長く、「使徒の働き」を通して、パウロの生涯を見てきましたが、今日が最後です。名残惜しいですが、使徒パウロの歩みについては、今後も聖書を学ぶ時に触れられることも少なくないと思われま。

パウロにとっては、ダマスコ途上でのキリストとの出会いは決定的でした(使徒 9 章)。それは事あるごとに、証されていることからわかります。それは、彼の救済観にも大きな影響を与えていたことも間違いありません。なにしろ、キリストから最も遠くにいた者を主は救って下さったのです。ともあれ、彼はキリスト教徒を迫害する側から、キリストを信じて伝える者となったのですから、衝撃的でした。彼を殺害しようとするユダヤ人たちが絶えず彼の周りにいたことも、ある面では当然でありました。使徒の働きを見るだけでも、パウロの周辺に起きた試練や困難は多々ありました。しかし、それらを主が越えさせてくださいました。そして、I コリント 10:13 にある確信を与えて下さいました。

さて、この書の結びの短い部分に「神の国のことをあかしし」(23)、また「神の国を宣べ伝え」(31)とあって、パウロが神の国について意識し伝えていることがわかります。ところが、パウロの書簡のなかには「神の国」についての記述は案外少ないのです。少ない中の一つを開きます。ローマ書 14 章 17 節です。「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」この、御言葉をどのように読み解いたら良いでしょう。パウロは旧約聖書に精通していましたが、そのメッセージはキリストという方に向かい、結集していくと考えていました。ですから、ごくわかりやすく言えば、「神の国」というのはパウロにとって、「キリストが支配する国」と言い換えられると考えていたということです。すなわち「キリストの王国は、義と平和と聖霊による喜びです」とローマ書の言葉は読めるのです。それはその後続く「キリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々にも認められる」という聖句からも明らかです。

パウロにとってはキリストこそ様々な問題を解く「鍵」だったのです。「私にとって生きることはキリスト」、「キリストにあるならば新しく造られたものです」、「キリストが私のうちに生きている」とあるとおりです。そうです。彼は救われてから、生涯にわたって、キリストを宣べ伝えたのです。この方が、人生に希望と喜び、慰め、力、成長を与えてくださると確信していたのです。

私たちも、キリストを信じ、キリストをもっともっと知り、この方を伝えていきましょう。その時に、信じない方もいるでしょう、拒否されることもありましょ。でもそれは今朝の箇所にもあるように、イザヤ書にも預言されていたのです。また、パウロ自身もそうした人々の反応を経験してきたのです。

私達はパウロの生涯をみてきました。この書にはパウロが皇帝に会ったのかとか、この後どうなったのかなどは記されていません。しかし、この書は完結しているのです。なぜなら、彼がただキリストを見上げてきたということが重要なことなのです。

チャペルコンサートを目の前にして、大切なのは、私達はコンサート開催業ではないということです。この出来事を通して、私達は、ますますキリストを見上げ、あの世界伝道をしたパウロにならい、キリストを伝えることです。そして、キリストに栄光があるようにと祈りましょ。

キリストのご支配する国にある者として、キリストに従い、キリストと共に歩み、キリストにある希望と喜びをいただきながら、キリストを伝えていきましょう。